

# 第50回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会報告

## 「オンラインを活用した外国語教育の実践」 ～学習者の自律学習の促進に向けて～

2021年7月3日（土）、国際言語文化センター主催にて、第50回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会がZoomによって開催された。「オンラインを活用した外国語教育の実践 ～学習者の自律学習の促進に向けて～」という総合テーマのもと、大阪大学サイバーメディアセンター教授 岩居弘樹氏が基調講演を行った。基調講演のタイトルは、「大学の外国語教育におけるICTの活用～協働学習の促進のために～」で、参加者は122名であった。

◆ 開催日時 2021年7月3日（土） 10時00分～12時00分

◆ 開催場所 Zoomによる研究会

◆ 次第

### 第一部

10：00 開会の挨拶国際言語文化センター所長・教授 金 泰虎

10：05 基調講演「大学の外国語教育におけるICTの活用～協働学習の促進のために～」

大阪大学サイバーメディアセンター教授 岩居弘樹

### 第二部

11：00～11：15 甲南大学におけるWeb活用授業の実践  
「学生の学びの意欲を高めるオンライン授業10の仕掛け」

国際言語文化センター教授 野村和宏

11：15～11：30 「オンライン授業～学習者の授業参加を促す幾つかの工夫」

国際言語文化センター教授 藤原三枝子

11：30～11：45 「イマージェンシー・リモート・ティーチング」から学んだ教訓：ある言語教師のアプローチ」

国際言語文化センター特定任期教員 Thomas STRINGER

11：45～11：55 意見交換

11：55～12：00 まとめと閉会の挨拶

国際言語文化センター准教授 石井康一

## 第一部 《基調講演》

講演者（岩居氏）は、ICTを活用した教育に関するワークショップや講演も多く、大阪大学を中心に教育機関におけるiPad等のタブレット・携帯端末やWebサービスを活用したドイツ語学習の実践研究をはじめ、「複言語学習のすすめ」、「世界のことばプロジェクト」等複数のプロジェクトを実施し、日本とドイツの大学生をビデオで結ぶ非同期型交流からWebミーティングシステムによる同期型交流へと発展させており、今回、ICTの活用例としてFlipgridをはじめ幾つかのツールを紹介いただき、その活用例を通してオンラインを活用した外国語教育について説明を聞いた。

Flipgridは無料で利用でき、撮影した動画を楽しめるよう自由に装飾もできるので、そうした自作動画を使ってさまざまなものを紹介する作業が学習活動として実践できる。それをドイツで日本語を学ぶ大学生へ送付し、またResponses、Views、Commentsなどが表示される仕様であるため、コメントを投稿し合うことによって交流を深めることにも利用しやすい。

オンラインを活用する場合にはリアルタイムでの交流は時差の問題があり実践が難しい側面があるが、上述のような動画作成の場合は時差も関係なく活動を行うことができ、お互いの学習成果も交換しやすく、さらに、共同作業も可能であるという利点があるという。

また、スクリーンレコーダーなどの機能も付いていて、テキストベースの学習からビデオ撮影による外国語学習を可能とする進化したツールとしてPadletというアプリも紹介いただき、さらには、イラストに音声が付くことができ、電子書籍（テキスト）も容易に作成できて配布も可能なサービスを提供するBook Creatorというツールをはじめ教育上有効なツールアプリが紹介された。その他、Google Doc、Miro、Reverso Contextなど具体的なツール名がいくつも紹介された。

## 第二部 《甲南大学におけるWeb活用授業の実践》

一番目の講演（野村氏）では新学習指導要領が示す学びの改革が示す主体的・対話的・深い学びという指針に基づき、また「よいと考える授業」を「学生が毎時間、期待感を持って教室に向かい、教室で共に学ぶことの喜びと意義を感じ、学習の達成感の余韻を味わって教室を離れることのできる授業」（『高等教育における英語授業の研究』2007）として、オンライン授業における学びの意欲を高めるポイントを講演いただいた。快適なZoom環境作り、My KONANの細やかな活用、毎時間の一定の枠組みでの実施、教材提示の工夫（音声再生ソフト、動画ファイル等の活用も含め）についての情報提供、ペア・グループワークや全員指名による授業中の適度な緊張感の維持、ライティング課題や読書マラソンの設定のほか個別のフィードバックをMy KONANにアップするといった教授手法のさまざまな説明もあった。形成的な学習評価の実施法として、シラバスに加えて成績評価方法を明示化することと学習途中の成果提示や成績評価ソフト（Easy Grade Pro）の活用を挙げ、「顔の見える皮膚

感覚のある授業」が提唱された。

二番目の講演（藤原氏）ではOECDの提唱する「人が個人として成功し社会が良く機能するためのキー・コンピテンシー」をもとに、メディアを相互作用的に用い、異質な集団で活動し、自律的に行動することをめざすという考えを授業に取り込んでいる事例が紹介された。「German Studies I」では、例えば、ドイツ旅行をグループで計画するというプロジェクト型の学習を設計し、フランクフルトの市民大学の学生向けのナレーション作成（ドイツ語による）と写真による交流を通して、日独両言語のバージョンで作成したビデオの送付を交流のプロセスとし、さらに感想やチャットを今後企画している。また、基礎ドイツ語クラスでは双方向ビデオアプリ（Flipgrid）を活用した学習やZoomでのQRコードによるドイツ語の文の音源を学習者に自律的に活用させるといった実践例の説明があった。

三番目の講演（Stringer氏）では、緊急事態における遠隔授業での教訓が紹介された。まずは一般的な原則として、繰り返し、調整すること、持続させること、ユーモアを入れること、振り返ることといったことの大切さが強調され、教育ツールとしては、二つのブラウザを使うこと、オンラインツールとしてはGoogle SuiteやTimerを活用すること、LMS(Learning Management System)としてEdmodoを活用することの利便性が説明され、ZoomのほかにQuizletやOnline Textbookの活用も勧められるとのことであった。そして、授業実践例として、語彙とそのリスニング、またユニット復習用の課題準備とリスニングにおける上記各種のツールの授業中での使用とその目的が例示された。

（文責：谷守正寛）

